



指導の全校体制化

進路指導や探究学習の支援を 全校体制とし、相乗効果を図る

埼玉県立所沢北高校

1分
で分かる軌跡

若手教師の増加に伴い、指導ノウハウの共有と継承が課題となっていた埼玉県立所沢北高校。そこで進路指導の3年間の流れや各学年での重点事項を一覧にし、校内研修で共有した。また、探究学習の充実を図ったことで、生徒の総合型・学校推薦型選抜への意識が高まる効果が表れた。例えば、生徒の発表の場を増やし、教師が丁寧にフィードバックすることで、生徒が試行錯誤の過程や自分自身のことをメタ認知できるようになった。生徒は自分が突き詰めたことを明確化できるようになり、同選抜の受験者も増加してきている。

#進路指導の全校体制
#探究学習のフィードバック

学校概要

設立 1974（昭和49）年
形態 全日制／普通科・理数科／共学
生徒数 1学年約360人
2024年度卒業進路実績
国公立大は、北海道大、東北大、筑波大、埼玉大、千葉大、電気通信大、東京外国語大、東京科学大、東京大、東京農工大、一橋大、東京都立大などに81人が合格。私立大は、慶應義塾大、上智大、東京理科大、早稲田大などに延べ1129人が合格。

変革の背景

若手教師の増加に伴い、 進路指導を全校体制に

2024年度にSSH(*1)の指定を受けた埼玉県立所沢北高校には、大きく分けて2つの課題があった。1つは、3年間を見通した進路指導の体系化だ。同校に10年前、教頭として赴任した経験がある木村郁文校長は、次のように説明する。

「以前と比べて、今は若手の教師が増え、学校が活気に満ちています。が、教師集団としては経験不足であることは否めません。それまでの学年団主導の体制ではノウハウの継承や蓄積が難しかったため、学校全体での組織的な指導として、よい点は継承し、課題は改善して指導力を向上させる必要があると考えました」
もう1つの課題は総合型・学校推薦型選抜に挑戦する生徒の育成だ。1学年主任の木下真介先生はこう語る。
「総合型・学校推薦型選抜は募集人員が拡大されるなど、その存在感は年々大きくなっていますが、同

選抜に対して生徒の多くは、入試の準備が大変といったイメージしか持っていませんでした。そこで、自分が熱心に取り組んでいる探究学習が同選抜での合格につながることを意識させようと考えました。そして、SSH指定校の採択に向けて、合格の鍵となる探究学習の充実に向けて取り組み始めました」

変革の一手①

進路指導の重点事項を データを基に示し、全校で共有

全校体制での進路指導の実現に向けて、進路指導部は24年3月、校内研修を実施。自校の進路指導の現状と課題、3年間の進路指導の流れと重点事項を示し、全教師で共有した(P.38図1)。当時進路指導主事だった木下先生は次のように説明する。
「各学年の指導の重点事項は以前と同じですが、3年間の指導を一覧にして可視化し、教師がいつでも見返して認識しやすくなりました。『中励み』『依存型学習者』から『自立型学

習者1へ』など、教師が生徒に繰り返して伝えている言葉も盛り込みました」
3年間の進路指導の流れでは、1年次の取り組みの重要性を改めて強調した。全生徒のデータを分析したところ、成績が下降した時期は1年次が最も多かったこと、難関大学に合格した生徒は他の生徒よりも1年次から学習時間が多かったことなどが分かったからだ。校内研修でもこれらのデータを示し、1年次は指導の比重を5割とするものの、学年が上がるにつれて教師のかかわり方を「指導」から「伴走」にすることで生徒の自立を促す方針を共有した。進路指導主事の新井大翼先生はこう語る。
「3年次に成績が伸びた生徒は、1年次から部活動に励みつつ、学習習慣や生活習慣が定着していたことがデータから分かりました。それをエビデンスに、『1年次にしっかり土台を築いてこそ、3年次の部活引退後に伸びる』と生徒に伝えていくことを、教師間で目録合わせをしました」
進路指導上の活動がより効果的になるよう、実施の順序も見直した。例えば、以前の2年次は11月に実力テ



1学年主任
木下真介
きのした・しんすけ
同校に赴任して12年目。地理歴史・公民科(政治・経済)。



進路指導主事
新井大翼
あらい・だいすけ
同校に赴任して5年目。英語科。



理数科長、SSH推進委員長
田口康弘
たぐち・やすひろ
同校に赴任して6年目。理科(生物)。



校長
木村郁文
きむら・いくふみ
同校に赴任して2年目。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任

*1 文部科学省「スーパーサイエンスハイスクール」。

ストを実施した後に入試動向などの説明会をしていたが、今は説明会を前倒して10月に行い、生徒に大学入試への見通しを持たせてから、11月に実力テストを実施する流れに変えた。

変革の一手 ②

生徒が探究学習の過程をメタ認知できるように支援

総合型・学校推薦型選抜に挑戦する生徒の育成では、まずは探究学習の充実を図った。同校の探究学習では、科学的探究力の育成を目指し、生徒が試行錯誤する過程を重視している。さらに、成果を他者に伝えることまでが研究であると捉え、プレゼンテーション力の育成も目指している。

そこで、他のSSH指定校の実践を参考に、24年度から理数科の「課題研究」では、3年次の研究論文の完成までに、生徒が発表する場を5回設けることにした(図2)。教師は、「主体的な研究になっているか」「うまくいかなかった過程にも目を向けているか」といった観点で発表を見取り、生徒にフィードバックする。生

図1

各学年の進路指導の目標と重点事項

	1 学年	2 学年	3 学年
目標	「生活習慣・学習習慣」の確立と定着	進路目標の明確化で中だるみ→「中励み」へ	学習と受験校選定で「圧倒的主体性」を発揮
重点事項	★学習計画表を活用して生活・学習サイクルを定着させる→ 授業・定期考査ベース のPDCAサイクルを確立 ★中学校との違いを明確に意識する→隙間時間の活用と計画性を持った時間管理	★志望する分野・大学等を明確にし、目標宣言をする→併せて、志望理由を明文化 ★「依存型学習者」から「自立型学習者」へと脱皮する ★修学旅行を機に「受験生」へと切り替えを図る	★目標逆算型の学習計画を実践する→ 模擬試験ベース のPDCAサイクルを徹底 ★生徒自ら併願パターンを選定・決定→情報収集と整理を意識 ★「授業第1主義」の完遂
目標学習時間	平日: 学年+1時間 休日: 学年+3時間		平日: 学年+1時間+a 休日: 学年+3時間+a
合格要因に占める割合	5	3	2
教師のかかわり	指導 ←————→ 伴走		

各学年の目標と指導の重点事項を整理。上記に加えて、学年ごとに進路行事の年間計画と各行事の位置づけを明文化して、全教師と共有した。
※学校資料を基に編集部で作成。

図2

理数科「課題研究」スケジュール

時期	活動名	目的・内容
1 年次 1~3月	研究テーマ・研究班決定	生徒は希望分野ごとに分かれ、自分が取り組みたい研究テーマを提案。議論と投票を経て、いくつかの研究テーマを決定し、同じテーマを希望する生徒同士で班を結成。
2 年次 5月中旬	研究目的プレゼン	班ごとにポスター発表形式で研究の目的・計画を発表し、教師と質疑応答を行う。研究の動機、先行研究を含めた背景などを確認。
2 年次 6月下旬	研究過程報告会	事前に研究過程報告書を提出。それを基に生徒が教師に途中経過を報告し、教師が助言。生徒間でも報告・助言し合う。
2 年次 9月下旬~ 10月初旬	中間発表会	試行・予備実験を含む研究過程をまとめ、ポスターセッション形式で発表。2年生は互いに発表を聞いて意見を出し合う。3年生も聴衆として参加して助言する。
2 年次 2月初旬	本発表会	班ごとに研究成果をスライドにまとめて口頭発表。発表8分間、質疑応答7分間。聴衆の教師と1年生は意見や助言を述べる。
3 年次 6月中旬	最終成果発表会	本発表会での聴衆からの意見、教師からの助言、自分たちが感じた課題や疑問を整理して追実験等を実施。その結果を加えた研究成果の総まとめをポスターセッション形式で発表。
3 年次 5~10月	研究論文作成	研究のまとめとともに、科学的な課題研究であったか検証。7月までに班ごとに草稿を作成し、10月までに個人で研究論文を作成。

「活動名」の赤の地色が発表の場。
※学校資料を基に編集部で作成。

徒は試行錯誤の過程の言語化や教師とのやり取りを通じて、自分が何を感じ、何を得たかを振り返り、何をどう生かすかを考えるようになっていくと、理数科長の田口康弘先生は語る。「生徒は例えば、『想定外の結果で実験に失敗した』とよく言ったため、手順を踏んだ実験であればどんな結果でもその考察が研究になると伝えて

います。そのように教師が取り組みの過程を評価すると、生徒は主体的に試行錯誤するようになり、その過程を言語化できるようにもなります。そうした力は、総合型・学校推薦型選抜にも生きると考えています」

集まり、生徒の様子の見取り方や声のかけ方などを助言し合っている。全教師で取り組む一体感を醸成し、探究学習の指導経験が浅い教師が相談しやすい体制にしたのだ。以上のように、生徒が探究学習を通じて自分自身のことをメタ認知できるようにするとともに、探究学習が総合型・学校推薦型選抜につなが

ノーベル賞受賞者による講演会を開催

世界トップの研究を身近に感じる場に

2025年3月、ノーベル物理学賞を1997年に受賞したアメリカ・メリーランド大学のウィリアム・ダニエル・フィリップス教授による講演会が同校で開催された（*2）。講演会の準備には物理部と生物部の生徒が参加。講演後に生徒は同教授・ノーベル財団職員と昼食をともにし、直接会話をした。講演のテーマは、「時間、アインシュタイン、そして宇宙で最もクールなもの」。質疑応答で生徒は、「多原子のイオンや分子を低温にすることに意義はあるのか」「原子を冷却する際に、なぜセシウムを選んだのか」など、様々な疑問を教授に投げかけた。「教授は生徒からの質問を特に気に入っていた」と、ノーベル財団職員から報告があったという。生徒は、「教授は原子の冷却が正確な時計の製作に役立ち、それがGPSなどの身近なものに結びついていく点を明確に説明してくれた。研究内容を身近に感じられた」「少し時間を置いてから同じ問題に取り組むと別の視点が見つけれられるという話が勉強になった」など、多くの刺激を受けていた。



生徒から12個の質問が上がった。会場は大いに盛り上がり、予定より15分間超過して終了した。

ることを認識させるため、同選抜の合格者も含め、卒業生の進路体験発表会を毎年3月に実施。全体会の後、学部学科別に生徒と卒業生が少人数で対話する分科会も行っている。25年度は、総合型・学校推薦型選抜に対応した補講も実施する予定だ。

さらに、生徒の視野を広げ、知的好奇心を刺激する場として、研究者による講演会を年2回実施している。24年度は、東京大学の教授と、ノーベル賞受賞者の講演会を開催し

た（コラム参照）。講演前には同校の教師が講演内容の基礎知識を伝える事前講義を行っており、ノーベル賞受賞者の講演会当日も、物理担当の教師が事前講義を行った。

「講演内容から、世界トップの研究も先行研究の1つであることなど、自分たちの研究とのつながりを生徒は感じたことと思います。講演者についてよく調べてきたからか、生徒から教科書外の知識が必要な質問も出ました」（田口先生）

変革の成果と展望

進路指導と探究学習を連携させ、学習意欲を高める

国公立大学の総合型・学校推薦型選抜の受験者は、23年度入試の19人、24年度入試の17人、そして25年度入試は24人と、増加傾向にある。

「24年度入試の総合型選抜で東北大学に合格した生徒は、探究学習で関心を持ったことを同大学で追究し

たいと、受験の相談をしてきました。これからもそうした明確な志望理由を持って大学入試と向き合う生徒を育てていきます」（新井先生）

25年3月末に行った校内研修でも3年間の進路指導の流れを共有し、指導の重点事項を再確認した。

「進路指導も探究学習も全校体制が整いつつあります。今後は進路指導と探究学習の連携を強化し、生徒の学習意欲を高めていきたいと考えています」（木村校長）

ベネッセが見た軌跡

生徒の自律的学習の姿勢を育む、体系的な指導体制の構築

所沢北高校では「夢を叶える力 時代を創る力」を合言葉に掲げており、データを基にした進路指導の重点事項を先生方全員で共有して指導計画を体系化したことで、先生方も生徒も学びの方向性が明確になったことが印象的でした。それによって生徒は、試行錯誤しながらも探究学習などに自律的に取り組むようになり、第1志望の進路実現につながることが、同校の魅力だと感じています。

探究学習の支援でも、生徒を見取るポイントをルーブリックにし、先生方の声かけを統一していました。それが、生徒が自信を深め、総合型・学校推薦型選抜と自身の探究学習との関連の理解につながり、国公立大学の同選抜合格者数の増加という結果に結びついたのでと思います。今後、同校のさらなる魅力化に貢献できるよう、私も全力でご支援させていただきます。

株式会社ベネッセコーポレーション首都圏支社
埼玉県立所沢北高校担当 八戸 崇



*2 講演会は、「ノーベル・プライズ・ダイアログ東京2025」関連イベントの「学生講義」として、科学への興味・関心の向上を目的に開催された。日本の高校では、会場校に応募した高校の中から同校が初めて選ばれた。

お勧めの分掌

管理職

教務担当

進路担当

担任